

Take action!

きっかけをつかんで、未来へと一歩踏み出そう!



Action 03

城戸翔太さん 東京都立大泉桜高校3年

絵と手話。得意なものを足し算したら進路が決まった

このコーナーは、「やりたいことがみつからない」と悩んでいる高校生へのエール。
ふとしたきっかけから、自分のやりたいこと=未来をみつけた高校生たちのストーリーをご紹介します。

絵が好きだった。 だからそれを追求しようと思った

「小さいころから絵を描くことが好きだったんです」と話す城戸翔太さん。東京都立大泉桜高校で美術を選択する3年生だ。入学当初は「美術の先生になれたらいいな」と漠然と考えていたが、2年生の時に『第28回全国高校生の手話によるスピーチコンテスト』に出場し、進路がより明確になったという。

絵を描くことと手話、 その両方を生かせる進路とは

実は城戸さんには身近に手話を使う人がいる。だから、物ごころついてからずっと手話での会話が当たり前。手話は城戸さんにとってあまりに身近だったため、「手話で何かをやりようと思ったことがなかった」という。けれど、手話スピーチコンテストに出場したことで、初めて手話を

特技として意識した。

その後、担任の先生との面談で、「自分のもっているものを生かしたほうがいい」とアドバイスされた城戸さん。出した答えが『特別支援学校の美術教師』だった。「絵と手話、両方を生かせるものはなんだろうと考えて、出した結論です。単純な足し算ですよね」と城戸さんは笑う。「せっかくこれまで自分が積み重ねてきたものがあるんだから、それを生かさないのはもったいないなって思ってた」。

桜高校の先生みたいに 親身になって生徒を助けてい

将来の夢が固まると、必要な美術の教員免許と特別支援学校の教員免許を取得できる大学を絞り込み、高2の終わりには具体的な志望校も定めた。

どんな先生になりたいか、と城戸さんに尋ねると、「桜高校の先生みたいになりたいです」という答えが返ってきた。例え

ば土曜日や長期休暇の間でも、本当は休みの先生が学校へ来てくれる。責任者がいないと、生徒が教室を使えないからだ。また、受験勉強のため、デッサン室を使えるように時間割をやりくりしてくれたのも先生だった。

未来というものは、進学したから、資格を取ったから終わるものではない。城戸さんは『特別支援学校の美術教師』という未来の先に、「生徒を全力で応援してあげられる先生」という、さらなる目標を抱いている。彼の明るさと努力が、その夢を応援してくれるだろう。



福祉科の先生にスカウトされて手話部のコーチも経験。嵐やゆずの歌を手話にすることもある



大学生で経営者の鶴田浩之さんという先輩や、やりたいことを見つけた高校生の話を読みたい人は、こちらをチェック!

<http://shingakunet.com/rnet/action>

